

2010年 中国視察同行記 ②



9月号に続き、「2010年中国視察同行記②」を掲載する。視察団一行は上海市と寧波市を結ぶ全長35.7kmの杭州湾海上大橋を渡って、6月16日～17日に寧波市、18日に無錫市を視察した。これら3都市の位置をアナログ時計で説明する。海上大橋を文字盤の中心とした場合、上海市は1時、寧波市は4時、無錫市は10時の方角にある。3都市間の移動時間はバスでそれぞれ3時間30分程度だった。寧波市では積極的な外資導入や工場誘致を進めており、一行は、寧波経済技術開発区投資合作局を表敬訪問し、経済開発及び国際貿易を統括する寧波市幹部職員と意見交換した。続いて、寧波鋼鉄有限公司(BAOSTEEL社)の熱間圧延コイル工場などを視察した。



寧波経済技術開発区についてレクチャーを受ける一行

寧波経済技術開発区投資合作局を表敬訪問

一行は6月17日午前中、寧波経済技術開発区投資合作局を訪ね、経済技術開発区の現状について、朱江川・同局副局長、劉曉維・同局新興産業科プロジェクト主幹、鄭文華・同局科長、葛琳・同局日本事業担当の4氏と会談した。冒頭、朱副局長が同開発区の状況について紹介した。続いて、葛日本事業担当がパワーポイントを交え説明した。

説明によると、浙江省の寧波市は揚子江デルタの南に建設された工業都市である。面積9,365k㎡。人口843万人。気候は亜熱帯季節風気候で年平均気温



寧波市の風景

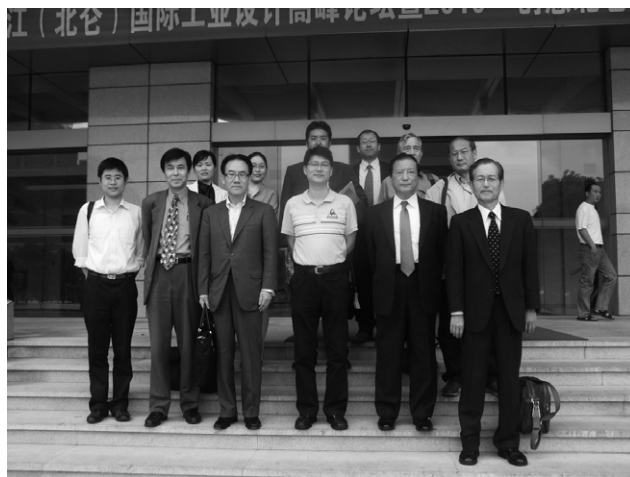


説明する寧波投資合作局の幹部職員

16.3度C。また、1984年に指定を受けた経済技術開発区は複数の地区に分散しており、全体では2009年末時点で合計1,448社が進出している。進出企業は石油化学、機械、紡績、食品、光通信など多岐にわたり、日本からは三菱化学、住友重機械、日新製鋼、ダイキン、三菱商事、三井物産、丸紅、伊藤忠商事が進出している。寧波市のGDPは2009年時点で国内12位となる617億ドル。経済成長率8.6%。1人当たりGDPは1万833ドルという。寧波港の特徴は、沿岸線で水深15m以上、中心水路で水深50m以上という天然の良港である事。直近の貨物取扱量は5億4,000万トンと上海港を抜き、世界1位となった。寧波港は舟山諸島の各港と一体的港湾施設として取り扱われ、寧波・舟山連合港と称されている。港の中心は北侖港である。

なお、寧波港は、阿片戦争での敗戦の結果、1842年、南京でイギリスと清国との間で締結された南京条約によって開港された港である。古くは平安時代の894年まで続いた遣唐使派遣時の寄港地であり、13世紀に日本の仏教僧栄西や道元が中国禅宗五山の1つ天童寺へ留学した際の上陸港として知られる。寧波市と上海市とは杭州湾をはさんで向かい合う。両市は現在、2008年に完成した全長35.7kmの杭州湾海上大橋で結ばれている。視察団が海上大橋を渡った時は常に湾一帯に霧がかかり、航空機上から雲海を眺める様な状態だった。たまに雲の切れ目から、揚子江が吐き出した大量の土砂を丸呑みしている茶色い蛇腹の様な海原が見え隠れした。一行は橋の最後まで杭州湾の絶景を望むことはできず、上海市街のスモッグと同様で、煙に巻かれた気分だった。

質疑応答では、「2004年頃、華東地域では開四停三（給電4日・停電3日）と言われたが電力需給の現



表敬訪問を終えて記念写真

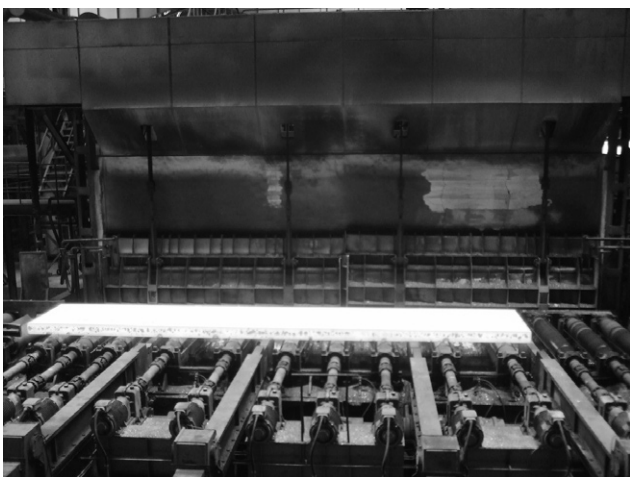
況はどうか?」という質問に対し、「当時は石炭火力発電所への石炭の鉄道輸送能力が追いつかずひどい電力不足に陥った。外資導入による電源開発が進んだ結果、電力供給量は順調である。発電所は、石炭火力と石油（重油）火力が中心である」と回答。「今後は環境に優しい天然ガスへの転換と併せて、同地域では雷が多発するため、雷対策を講じて供給信頼度を向上させる事が課題である」と述べた。

寧波経済技術開発区を取り巻く発電事情に関しては、「寧波地区の発電所件数は建設中のものを含めて合計14件で総発電能力は合計1,040万kWである。発電した電力は、35kV、110kV、220kVの送電線路を通じて電力供給を行っている」という。「浙江省内には原子力発電所があるのか?」との問いに対し、「同省嘉興市に秦山発電所Ⅰ～Ⅲ号（合計305万kW）がある。ほかに台州市で三門Ⅰ号（110万kW×2基）を建設する予定。風力、太陽光など再生可能エネルギー発電も導入拡大を図る意向だ」と述べた。

寧波鋼鉄有限公司の生産ラインを視察



熱間圧延工程の生産ラインを視察する一行

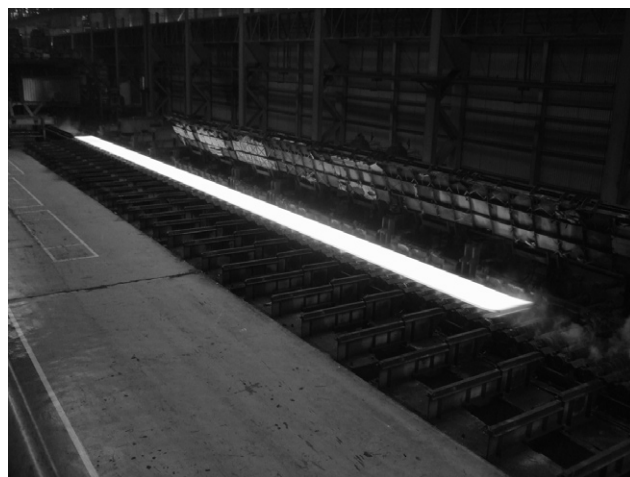


プレス前の溶融鉄

一行は6月17日昼、寧波市北侖区臨港二路にある寧波鋼鉄有限公司を視察した。宝山製鉄の出身で新日鉄君津工場で実務研修を受けたという陸 志新・副総経理から事業概要について説明を受けた。説明によると、同社は2003年、宝山製鉄が買収した寧波ケンリュウ製鉄を母体として設立された。2007年、政府の指導により、株式保有割合は宝山製鉄51%、杭州製鉄34%、同社9%などとされ、宝山製鉄の系列会社として人事交流も行っている。従業員数3,300名で平均年齢29歳という。

同社の敷地に隣接して、30万トン級の船舶が停泊できる港湾施設が整備されており、埠頭の受け入れ基地から工場内までベルトコンベアを使って原料の石炭、鉄鉱石などが自動搬入されている。石炭は国産かオーストラリア産を使用しているという。

寧波鋼鉄の年間生産能力は薄板鋼板425万トン、熱間圧延コイル415万トンとされ、生産した製品はすべて中国国内で使用されている。工場の電力設備について、現在、生産用の電力は全量を電力会社からの買電で賄っている。なお、バックアップ用電



プレスされて延ばされた薄板鋼板

源として3,000kWディーゼル非常用発電設備を1台、圧延工程での冷却水ポンプ用として4,500kW発電設備を1台それぞれ設置している。今後、焼結炉の余熱を利用するガスタービン発電設備(13.5万kW×2基)と高炉向けのTRT発電(乾式)を建設する予定という。

説明の後、一行は工場内へ移動して、幅1.6m、厚さ1.2mm～12.0mmの鋼板が高炉の湯口から圧延・形成されるまでの生産ラインを視察した。続いて、一行はバスで移動し、工場に隣接する30万トン級の船舶が接岸できる埠頭を視察した。埠頭で、陸副総経理は「宝山製鉄の製品は自動車や原子力発電所向けに使用されるため、超高品質の鋼板製品の供給が厳しく要求される。同社の鋼板製品は、宝山製鉄の製品と比べた場合、正直言って品質が若干落ちるため、別の用途向けに供給しています」と漏らした。作家山崎豊子の小説『大地の子』の主人公陸 一進と同じ姓を持つ陸副総経理の忌憚のない話を聞いて、私は大変驚いた。私の中で中国観が変わった。



コイル状になった鋼板の販売価格は1巻あたり13,500米ドル



後列右から3人目が陸 志新・副総経理